



TITLE:

マラヤ北西部における中国人集落 の構造 (下)

AUTHOR(S):

前田, 清茂

CITATION:

前田, 清茂. マラヤ北西部における中国人集落の構造 (下). 東南アジア研究 1966, 4(1): 44-64

ISSUE DATE:

1966-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55188>

RIGHT:

マラヤ北西部における中国人集落の構造（下）

前 田 清 茂

A Chinese Community Structure in Northwestern Part of Malaya (continued)

by

Kiyoshige MAEDA

4 社会構造(Ⅰ)—自治組織

(1) 組 織

アロールジャングスの中国人集落は、地域的にはパダンララン村に属し、行政的にも、形式的には、マレー人村長 (ketua kampung) の統制下におかれるようになってはいる。しかし、実質的には、この集落は、村長の統制下ではなくて、中国人には、中国人集落を代表する人 (ketua China) ——かりに、中国人世話人と呼んでおく——がいて、この世話人は、パダンララン区 (mikim) のマレー人区長 (penghulu) に直接つながっている。

アロールジャングスに限らず、一体にマラヤの中国人は、自分達の父祖がこの地において「開地聚居」¹⁸⁾ (P'i Ti Chü Chü) したものだという根強い自負心をもっていて、マレー人の村長はもちろん、区長に対してすら、指揮、命令されるという表現は好まない。集落のみならず、国家全体についても、同様のことがいえて、平素からマレー人に対して、かなり強い対立意識を抱いているものと見受けられた。

アロールジャングス中国人集落の世話人は、中国人集落民などによって、選挙されるものであるというのが、調査前におけるわれわれの推測であった。しかし調査の結果、事実はこちらに反して、全く、世話人選挙に関して何らの規定もなく、ただ、村人衆目の見るところ集落の財産家で、社会的地位も高く、時間的な余裕をもちえ、しかも、社会奉仕 (公益, Kung I) に熱心な年輩者が、自然に代表者に推されることになっているとのことであった。

従って、任命者もなければ、任期も定まっていない。また、マレー人の側から ketua China といわれる世帯番号 (60) に直接尋ねてみても、自分は単なる世話人 (幫助人 Pang Chu Jên) に過ぎないという。集落の中国人は、この人を平素、伙盛 (Huo Shêng) と名前だけを呼んでおり、¹⁹⁾ 公職名を強いてつければ何というかとの問に対して、考えたあげく、「代表人」(Tai

18) 開拓して、集落とすること。

19) 村内には同姓が多いので、姓は省略して名だけでよぶ。敬称はつけなくても、日本のよびすてのような感じはない。

Piao Jên) が適当であろうということであった。

それでいて、集落の融和と団結が自然に保たれていることは、われわれとして、当初は少なからず了解に苦しむことであった。結局、財産家で人望ある者、このような人が、地域社会のみならず、同族、同郷出身者、同業者などの集団においても奉仕すべきであり、一般の中国人は、それよりも家業に忙しいのが実情と見受けられた。

(2) 代 表 者

アロールジャングスには、60年も昔からすでに私塾があり、また、現在、集落の中央部にある中国人小学校は、1929年に創設せられた。こうした中国人学校は、当時の統治者から援助を受けることなく、この集落の財産家で、社会事業のために寄付し、奔走することを惜しまない人達によって、自主的に創設し、維持・運営せられて現在に至った。

集落の人達のほとんど唯一の、長期にわたる共同事業であるこの小学校は、現在、アロールジャングスの中国人戸主全員が、この小学校の理事（董事，Tung Shi, Board of Manager）および理事長（主席，Chu Hsi, Chairman）を選出し、この理事長以下によって小学校は運営されるようになった。そして、いわば小学校の校区の代表者である理事長が、周辺のマレー人や村人達から、自然に集落の行政代表者と目されるようになったものであるらしい。

従って、代表者らしい者はあっても、副代表者も正式には決められていないし、村の行政上のことを議する機関、組織もない。村政は、主として、理事長である世帯番号（60）、＜福建省安溪県仙都村出身、精米所経営、47才＞に委ねられ、彼が単独で決しかねるような事態が発生すれば、世帯番号（26）、＜広東省台山県出身、金舗および雑貨店経営、33才＞にはかり、なおも相談を要するようなことがあれば、世帯番号（18）、＜理事長の実弟、雑貨店経営、42才＞および世帯番号（22）、＜広東省台山県出身、金舗経営、55才＞も加わることがあるといい、村民大会を開くこともあるかとの問いに対しては、それほどの大事は今までなかったということであった。

この4名は、もちろん、小学校の理事に選出されている。結局、集落の行政は、集落の住民たちの共通の関心事である子弟の教育を委ねられたもの、集落における唯一の公職である小学校の理事に選出されるほどの有力者が、副次的な職能として依託されたようになっているといえる。

なお、アロールジャングスの行政、学校運営、その他公的なことについて、早期にこの地に到達し、集落開拓に功勞のあった老人達（老先輩，Lao Chien Pêi）は、事実上隠居して、これに関与していないようである。

小学校理事会の役員氏名などは、後の教育に関する項において表示する。

5 社会構造 (II) — 家族と婚姻

(1) 家 族

アロールジャングスの中国人の家族総数は、表3（前号 p. 77）などで示したように65戸であるが、それを家族員数別、形態別に示すと表14のようになる。

表14 A. J. 中国人の員数別、形態別家族数

員 数	単独家族	夫婦家族	核 家 族	幹 家 族	拡大家族	計
1	4					4
2		3				3
3			2			2
4			2			2
5			8	1		9
6			5	3		8
7			6	3		9
8			2	4		6
9			4	2	1	7
10			2	2	1	5
11				3		3
12						0
13					1	1
14				1	1	2
15				1		1
16				1	1	2
17					1	1
計	4	3	31	21	6	65

1 家族の平均員数は7.4人である。表14でも5人家族から9人家族の数が多い。1人ぐらしもあれば、最も大きな家族数は17人家族が1戸あり、16人家族2戸がこれについている。1家族の家族員数が多いのは、必ずしも、親と有配偶の長男を中心とする3世代の幹家族（stem family）²⁰⁾や、親と2人以上の有配偶者とその子供から構成される3世代の拡大家族（extended family）が多いことのみによるものではない。表14でも明らかなように、親と未婚の子供から構成される核家族（nuclear family）の家族員数もかなり多い。これは、結局、子供の数が多いということである。

未婚の若者達は、理想的な子供の数は3名ないし5名とっているけれども、アロールジャングスでの現実には、全く産むに任せている状態である。既婚者はほとんど、産児制限（節育）

20) G. P. Murdock の家族類型の概念による。

——避妊および堕胎——について、一般的な知識はもっているようであるが、羞恥心（怕羞 Pá Hsiu）がそれを行なわせない。都会地のアロールスターに行けば別として、アロールジャングスには、産児制限に関する器具および薬品の販売は全く見られなかった。

周辺のマレー人の家族が、ほとんど核家族に分散するのに比べて、中国人の家族は、数の上では核家族が多くても、幹家族や拡大家族も決して少ないとはいえない。しかし、核家族、幹家族、拡大家族間の流動変化は激しく、子供は結婚すると、別に1戸を構える傾向が強い。このことは、拡大家族数の少ないのを見ても明らかである。

事実、アロールジャングスの中国人家庭では、家長が年寄ると、マレー語や急変する世事にうといために、隠居して、子供に家長権をゆずる傾向が強い。そして、家長権をゆずるに当たっても、長男がこれを継がねばならぬとする考え方は薄く、また、家業は必ず長男が継承すべきものであるとも考えていない。そして、子供が家長権をゆずり受ける現象は、決して、子供達が老人を軽視しているということではなくて、子供達は家庭内においては、常に父母に対して畏懼の念あるかの如くつかえ、父母は常に家庭の精神的支柱になっている。

一般的にいうならば、父が在世している間、家業の上で協同が必要とされる場合には、既婚の息子家族も同居して、家業に従事するが、父が死亡すれば、息子達は別の世帯をもうけて、独立の生計を営むようである。

父母の位牌（香炉位 写真6参照）も、とくに長男が守らねばならぬとする考え方は薄い。また、たとえ既婚の兄弟の家族が母親と同居していても、生計、食事は、兄弟家族別々に行なっていて、母親は末弟の家族員になっている場合もある。

従って、アロールジャングスの中国人の間では、拡大家族は経済的な事情によって構成され、必ずしも、望ましい家族生活であるという考え方は存在しない。核家族の中において、子供が成長すれば、職を得たものから他出し、家にとどまった息子が妻をめとって、親の面倒を見る結果、幹家族の数が比較的多いのである。そして、これも、親が死亡すれば、核家族へと移行する。

電気は夜間のみ、水道も娯楽機関も一切ない、このアロールジャングスの、しかも、建築

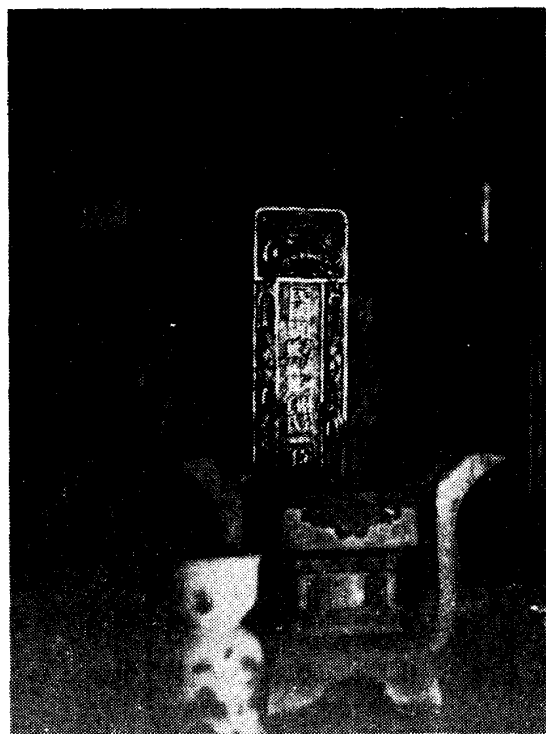


写真6 Ketua China の両親の位牌で、アロールジャングスでは最も立派なものである。

後数十年を経た陋屋において、核家族ならばともかく、多人数で、しかも新旧の考え方の対立しやすい、幹家族あるいは拡大家族の親子世代が、円満な人間関係を維持し続けることは非常に困難なことであり、とくに、嫁と姑、嫁と嫁の間の不和などによって、核家族化する傾向はますます強い。

(2) 婚 姻

(A) 婚 姻 年 令

婚姻年令については、年長者の間では、婚姻は遅いほどよいといわれている。アロールジャングスの中国人年長者の大部分は、中国から、独身、あるいは、結婚していても妻を故国に残して、単身出稼ぎに来たものであり、長期の苦難を経て、一応の経済的安定を得るに及んで、ようやく、中国あるいはマラヤで妻を娶ったか、または、故国に帰って妻を迎えて来たものである。マラヤの都市においても、最近、若者が経済的な自立を見ないままに、恋愛に走り、早期に結婚する風潮が見られるが、アロールジャングスでは、恋愛の噂もほとんど聞かず、極端な早婚の例もなかった。これに関連して、アロールジャングスの戸主で55才以上の者18例の婚姻年令を見ると、平均男28.9才、女19.0才である。これに対して、35才以下の戸主14例について見ると、その平均は、男23.2才、女19.9才である。女性の場合は僅かに上昇しているというものの、男性の場合にはかなりの低下が見受けられる。

(B) 配偶者の選択など

アロールジャングスは、さきにも述べたように、道路の開通以前は交通は至って不便で、陸の孤島ともいふべきところであった。それに加えて、集落内は、後に表示するように同姓が多く——林姓と陳姓で全家族65戸の中、30戸を占める——、中国人の同姓不娶の原則によって、配偶者の選択範囲は、いちじるしく限定される。男性は、商用、就職、通学等で、他の市街、集落へ出て、配偶者を選ぶ機会がないでもないが、生活環境劣悪なこの集落へ婚入して来る女性は得がたい。結局、男性、女性とも年長者、あるいは、アロールスターの周旋者の仲介によることが多くなるとのことである。

アロールジャングスの中国人も、出産、結婚、死亡の3件、とくに結婚と年長者の葬儀を最重要行事と見ており、形式を尊んで、費用をかけて、大規模に行なう。²¹⁾ 周辺のマレー人農民の多くが、中国人から見れば、きわめて簡易な手続と、僅少の費用で結婚して、甚だしいものに至っては、1カ月を経過せずに離婚し、時には、いったん離婚した夫婦が復婚するという事などは、中国人が極めて奇異に思い、かつ、軽侮の念をもつところである。

アロールジャングスにおいて、中国人とマレー人は、たとえ壁を隔てて生活していても、平素の交際はもちろん、相互の出産、死亡についても、何等の意思表示を行なうことがない。た

21) 一般に結婚費用は約M\$ 1,000＝邦貨12万円。

だ、中国人の結婚の場合に限り、新郎の戸主が、マレー人の然るべき人——プングルとは限らない——に祝儀金を渡して、マレー人のために別な会場と料理の準備を依頼して、「酒」²²⁾食をふるまう。しかし、この場合でもマレー人は、中国人に対して祝儀を贈ったり、または、マレー人の結婚に際して返礼として中国人を招待するようなことはなく、全く、中国人からマレー人に対する一方的ふるまいである。

こうしたことによって、中国人が人の一生の中で、結婚を最も重視していることがうかがわれ、この「終身大事」²³⁾(Chung Shên Ta Shih)の大事意識が、平素ほとんど往来のない中国人社会から、マレー人社会に対して唯一の意思表示を行なわせるものと思われる。

表15 A. J. 中国人の姓と出身地別家族数 (註：○印は客家である。)

出身地 姓	福建省					广东省					計
	安溪	南安	同安	福州		台山	中山	汀州	潮州	海南	
林	19	1				2					22
陳	1	4	2			1					8
鐘	6										6
洪			5								5
張	1							①	①		3
梁	2										2
施	2										2
倪	1										1
白	1										1
蕭	1										1
廖	1										1
戴		1									1
翁		1									1
謝		1									1
季		1									1
尤			1								1
朱				1							1
楊				1							1
黃				1							1
梅						1					1
鄺							1				1
任								1			1
吳									1		1
周										1	1
計	35	9	8	3		4	1	2	2	1	65

22) マレー人はイスラムの戒律によって、酒類は飲まないことになっているが、こうした席では、酩酊するものもあるという。

23) 終身大事とは結婚の意である。

(C) 姓 と 婚 姻

アロールジャングスの中国人の姓の種類はかなり多い。戸主の姓のみを中国の出身地別に示せば、表15のようになる。さきに表3において示したように、福建省安溪県出身者が全体の半数以上にも及ぶが、その3分の2近くは林姓である。安溪県出身者といっても出身地は5つの村に分れていて、仙都村、および、山道村出身者が最も多く、この両村の出身者は大部分林姓である。

アロールジャングスでも、同郷出身の同姓者は同祖先の親戚（親人，Chin Jên）であるとされており、しかも、前にも述べたように、同姓不娶——何ら親戚関係のない、遠隔地の同姓をも含めて——の原則が、いまなお固く守られているために、配偶者の選択範囲はかなり限定される。この限定範囲を一層狭める要因として、望ましい婚姻相手は、なるべく中国の近接地域²⁴⁾出身者の中から求めようとする傾向が存在することである。アロールジャングスまたは近郷に居住して、異姓であって、故郷が近接しており、その上、一般的な諸条件が合致していなければならぬということは結婚難に更に拍車を加えることになる。たとえば、アロールジャングスの村内婚の例を見ると、表16のようになる。なお、広東省出身者は10戸、福建省福州の出身者は3戸あるが、村内で通婚している例はない。

以上の点を考察しても、配偶者がアロールジャングス以外の地から求められるようになるのは、不思議ではない。

表 16 A. J. 中国 人 の 村 内 婚

世帯番号	夫の姓	階層評価	夫の中国 の出身地	妻の姓	実家の 階層評価	妻の中国 の出身地	備 考
(14)	倪	(中)	安溪県	鐘	(中)	安溪県	妻は、(15) 鐘氏の娘（初婚、再婚とも）
(15)	鐘	(中)	〃	林	(上)	〃	妻は、(18) と (60) の林氏の姉
(75)	鐘	(下)	〃	林	(下)	〃	妻は、(24) 林氏の妹
(77)	鐘	(中)	〃	林	(中)	〃	妻は、(68) 林氏の娘
(61)	※ 林	(上)	〃	梁	(上)	〃	故人の夫は、(28) 林氏の弟
(12)	陳	(下)	同安県	鐘	(下)	同安県	妻は、(81) 翁氏（継父）の娘
(35)	陳	(中)	〃	劉	(中)	〃	妻は、(47) 尤氏の妻の母
(47)	尤	(中)	〃	陳	(中)	〃	妻は、(35) 陳氏の娘
(57)	陳	(下)	南安県	林	(下)	安溪県	妻は、(24) 林氏の妹

註：備考の（ ）内は世帯番号を示す。※は故人。

(D) 婿養子と養子・養女

アロールジャングスにも、結婚の後、男性が妻方の姓を名のる、いわゆる婿養子の風習はな

24) 同村出身者の婚姻例が多い。下層者には、他村、他県出身者との通婚が見られる。

²⁵⁾ 「女婿」(Nü Hsü) というのは、すべて娘の配偶者を指し、婿養子のことではない。しかし、やや似たようなものとして、「招女婿」(Chao Nü Hsü 養子をもろう) という言葉はある。招女婿の場合、結納金(聘金 Pin Chin)も挙式費用もすべて妻方が負担する。ただ、この場合、生れた子供の幾人かに妻方の姓をつけるという約束はある。また、子供がないときは、親戚・知人あるいは他人、または、タイ人からもらうこともできる。「送兒子」(Sung Êrh Tzū 子供をやる)あるいは「買兒子」(Mai Êrh Tzū)といい、女兒の場合 M\$80~100~120²⁶⁾ ぐらい、男は M\$200~300 ぐらいが謝礼(紅包 Hung Pao)の基準とのことである。

しかし、出生届を済ませてしまった子供は、姓名の変更が面倒なうえ、里親に対する監督があって、たびたび子供を連れてアロールスターにある福利部(Fu Li Pu—Department of Social Welfare)へ出頭しなければならないので、病院の看護婦などに依頼しておいて、出生直後もらい受け、初めから自分の子供として届け出るのが好都合とのことである。

なお、養子、養女とは少し離れるが、老後たよるべき子供がない場合、クアラルンプールの養老院(安老院, An Lao Y'üan)に入れば、それですむ—とは、ある中学生の言葉で、現代の中国人青年の家族生活に対する考え方の一端を表わすものとして興味を感じた。

(E) 妻の出身地

戸主について、婚姻時における妻の出身地を見ると、表17のようになる。表17で妻の出身地をAとBに区分したが、Aに属する地域は、アロールジャングス、および、その近接地域である。そして、ケダー州の首府であるアロールスターを除けば、すべて中国人の集落である。表17においては、事例の数も少ない上に、アロールジャングスの女性の婚出先が明

表17 A. J. 中国人戸主の妻の出身地

妻の出身地名		数
A	Alor Janggus	8 例
	Alor Star	8 〳
	Ayer Hitam	4 〳
	Tepi Laut	3 〳
	Kubang Rotang	2 〳
B	Kedah 州内のその他の地域	9 例
	Kedah 州外のその他の地域	2 〳
	中 国	5 〳
	不 明	6 〳

白でないので、これのみによって、ただちに断定することはできないが、アロールジャングスを流れる運河の上流にあるシンパンウンパット(Simpang Empat)(図1 前号 p. 72 参照)、ジュルン(Jurun)、トピラウト(Tepi Laut)、アイエルヒタム(Ayer Hitam)は、この地域の中国人のひとつの社会圏を構成しているように思われる事柄が少なくない。表17では、この社会圏が同時にひとつの通婚圏であることを示してはいないが、ketua China と呼ばれる世帯番号(60)の妹がシンパンウンパットの最も大きな精米所に嫁いでいる例などもあり、アロールジャングスの女性の婚出先ならびに上記の諸集落についての調査をすれば、この点が明らか

25) 夫と妻が同姓ということは、中国の習慣として考えられない。

26) M\$ 1 ≡ 邦貨118円

になるであろう。

ただ、前にも述べたように、アロールスターから、アロールジャングスを経て北上する高速道路が完成し、従来、陸の孤島の観のあったアロールジャングスおよび上記の諸集落は、一躍、交通の要路になって、主としてアロールスターとの交渉が頻繁になり、旧来の水路による往来はほとんど絶えたので、こうした社会圏は現在では崩壊しつつあることが考えられる。

(F) 村内における親族関係

今まで述べてきた村内における婚姻関係について考察しても、すでにアロールジャングス中国人集落の性格の特徴が多少示唆されているが、親族と姻族の関係について考察すれば、この集落の構造的特徴はいっそう浮き彫りにされる。

アロールジャングスに最初に来た中国人は、世帯番号(48)洪氏の父、福建省同安県出身といわれるが(表5 前号 p. 80 参照)、この洪氏はすでに死去し、その子の洪氏はアロールジャングスに親族も姻族もない。洪氏と同姓の家はあるが、同じ同安県出身であっても、中国人のいう同郷同祖先ではない。また、親族・姻族という点からも、広東省出身者10戸の間、福建省福州出身者3戸の間には、何らの関係も見られない。集落内の主な親族・姻族関係から構成される集団は、すべて、福建省安溪県あるいは同安県、南安県出身者である。その主なもの3つ

図 3

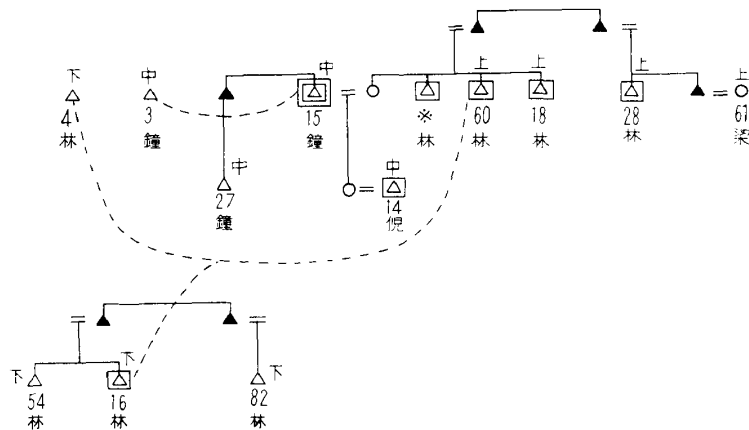


図 4

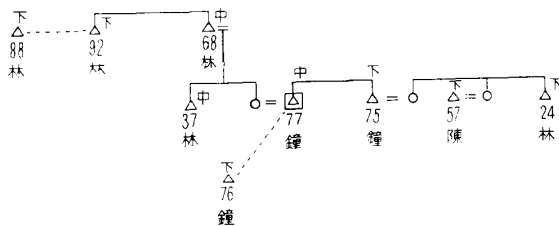
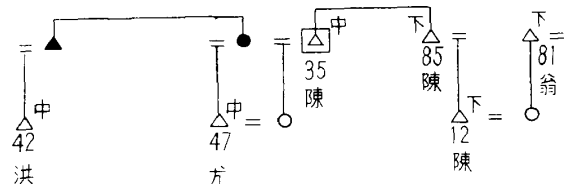


図 5



備考：△—男 ● } 死亡 数字は世帯番号 上中下 階層評価 …… 同郷同祖先
 ○—女 = 婚姻 □ 小学校理事 ※は、アロールスターへ移住

を図示すれば、図3、図4、図5のようになる。

図3、図4に示された戸主はすべて安溪県の出身者であり、図5の場合は同安県、および南安県の出身者である。これらの図には、表10（前号 p. 88）による階層評価の印（上・中・下）、および、小学校の理事である者には□印を付しておいたが、注目すべきことは、アロールジャングスで最も裕福であるといわれる6戸のうち、4戸までが、図1における林氏の一族である点である。しかも、実質的に集落の指導的役割を演ずる小学校理事15名、実際には転出した者が1名あって14名の内、10名がこの一族から出ている。したがって、この一族の中で経済的にも、社会的にも重きをなすものが、ketua China と目されるようになるのは自然のおもむくところである。

このように、細部にわたって考察を加えてくると、一見、まとまりのなさそうなアロールジャングスの中国人集落の構造は、はっきり浮き彫りにされる。行政組織としては何ひとつ明確なものがなくても、この集落の中核をなすものは、社会的にも経済的にも福建省の安溪県——主として仙都村——の出身者である。同じ福建省出身者であっても、福州出身者、あるいは広東省出身者は、大部分第2次世界大戦中に、米作地帯であるこの地区に疎開して来たとか、精米所に住み込みの労働者であるとかであって、いずれにしても、アロールジャングスの中国人の主流をなすものとは考えられない。

極言すれば、閩南の安溪県の1分村が、このマラヤの北西隅に存在しているということであって、ある安溪県出身の中国人は、ここは「小安溪」(Hsiao An Chi) で、言語、風俗、習慣のすべてが、祖国そのままであると広言していた。

6 宗教および主な年中行事

アロールジャングスの中国人は、年長者も含めて、一般的に、日常の慣習として家族の守護神である神仏を祀り、あるいは宗教に関係ある年中行事を形式的に踏襲しているという点では、宗教に関心を払っているように見えるが、とくに個人として信仰心が強いとは思えない。

福建省出身者および客家出身者は、一家の守護神仏として、「大伯公」(Ta Bo Kung, 写真7参照)²⁷⁾を祀るものが多く、また、同省出身者には商業従事者が多い関係からか、「関帝」(Kuan Ti, 写真8参照)²⁸⁾を祀る者も少なくない。これに反して広東省出身者は、「観音」(Kuan Yin, 写真9参照)を祀るものが多い。その他に、天の神として、福建省出身者は「天官賜福」(T'ien Kuan T'zū Fu, 写真10参照)を、広東省出身者は「天神」(T'ien Shên)を祀り、かまどの神として、福建省出身者は「司命」(Sū Ming)を、広東省出身者は「灶神」(Tsao Shên)を祀る。また、広東省出身者のみ「地神」(Ti Shên, 写真11参照)を祭る。

27) 大伯公とは土地神の別名で、中国固有の神ではないという。

28) 関帝は、財産に関する神で、特に商業従事者にこれを祀るものが多いという。

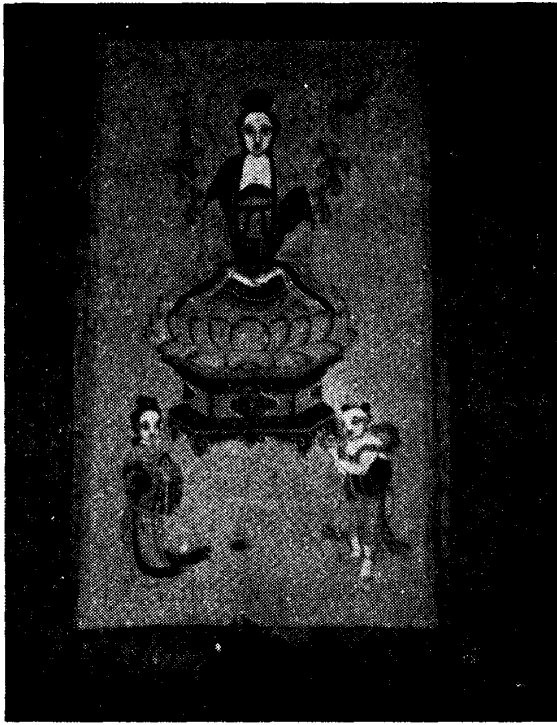


写真7 大伯公の肖像。



写真8 関帝の肖像。

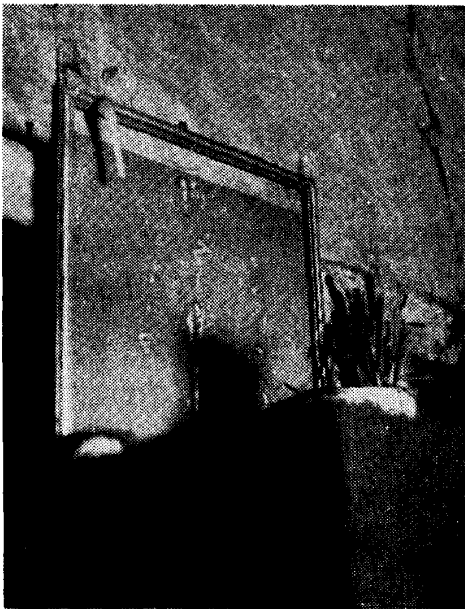


写真9 観音を祠る例。

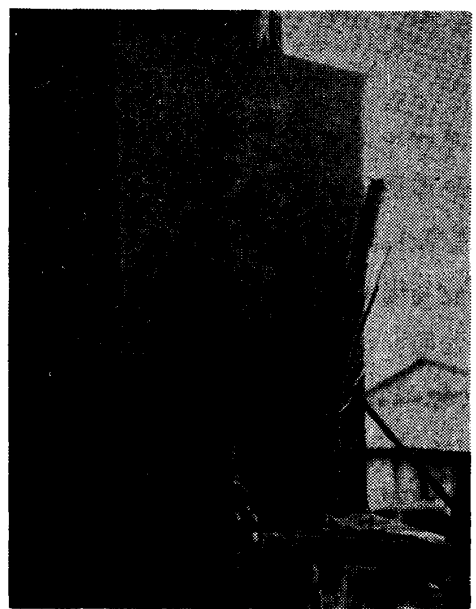


写真10 天官賜福を祠る例。



写真11 地神を祠る例。

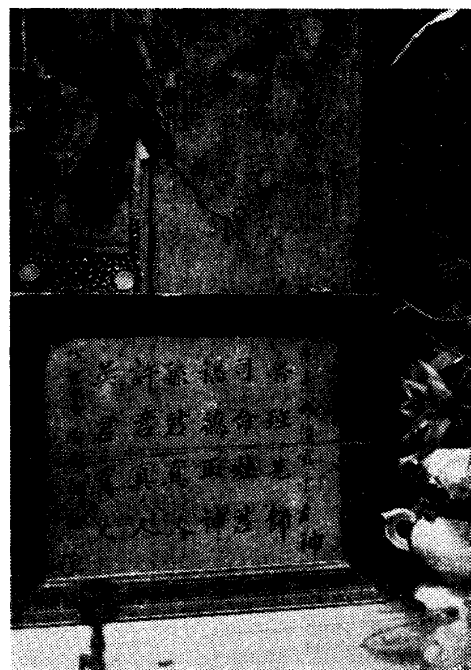


写真12 家族の神々の一覧表。

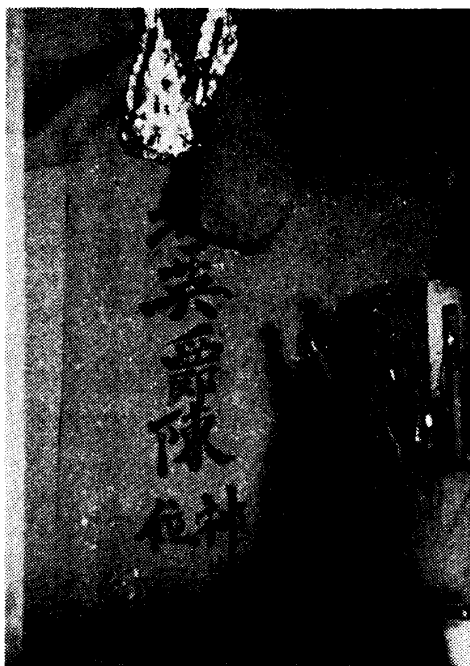


写真13 紙の位牌。



写真14 漢の忠臣蘇武，歴史の時間に用いられる掛図。（小学校にて所見）

観音は、福建省出身者の間では「仏祖」(Fo Tsu) と呼ばれ、潮州出身者には「亜娘」(Ya Nian) と称され、広東省出身者以外の家庭でも祭られることは間々ある。しかし、アロールジャングス周辺の中国人集落で、大伯公あるいは関帝を祭り、門前に天官賜福の線香立てを出しているものは、大体、福建省出身者であると見て間違いのないということである。なお、アロールジャングスの中国人の中には、「天主教」(T'ien Chu Chiao—カソリック), 「基督教」(Chi Tu Chiao—プロテスタント) の信者はなく、もちろん、イスラム教徒もいない。

アロールジャングスのほとんどの中国人の家庭には、表の間の正面に、さきに挙げた家族の守護神仏の肖像画の1種と、その横に父祖の位牌および諸種の神々の一覧表のようなものを祭っている(写真12参照)。守護神仏はいずれも彫刻像ではなく、赤い紙に画かれた絵であり、色あせているものも多く、また、貧困な家庭では、単に赤い紙に、金色で神仏の名を書いただけのものもあり(写真9参照)、父祖の位牌さえも、赤い紙に字を書いただけのものがある(写真13参照)。そして平日の朝夕には、おのこのの神に3本ずつの線香を供え、1日と15日²⁹⁾には、1対の赤ローソクを点じる。しかし、朝夕線香を供え、あるいは赤ローソクを点じるのは多く老主婦であって、若年者がこれを行なうのを見かけたことがない。この点について、中国人に質問したところ、老人は毎朝起床するのが早いというだけのことで、若年者が祭神して、何ら差支えはないとのことであった。

後の教育に関する項で述べるように、中国人がこの地域に移住して来たばかりの60年も以前に、この地にはすでに私塾があり、また、1929年の学校設立、1932年の校舎建築など、中国人が教育に対して払ってきた努力は、アロールジャングスにおいて、今日、現実に見ることができる。また、集落内には「医葯房」(Yi Yao Fang—Clinic—診療所) があるが、1軒の寺廟、1カ所の祠さえもない。

ただ、アロールジャングスを流れる運河の上流にあるシンパンウンパットに、アロールジャングス、シンパンウンパット、ジュルン、トピラウト、パダンハン(Padang Hang) の5つの中国人集落民が協同して建てた「克明堂」(K'ê Ming T'ang) という小さな祠がある。建築年は1958年で、総建築費はM\$5,935である。しかし、その歴史と規模において、小学校や医葯房に比べて格段の見おとりがする。

結局、出稼ぎ地でのきびしい現実と、教育の普及によって、宗教はほとんど迷信と認められ、僅かに生活慣習として、一部に形式のみを残しているように見える。マレー人がイスラムを固く信じ、生活の中において、その戒律を守り続けているのに反して、中国人の場合は多分に融通性があり、甚だ現実的であるといえる。

29) 中国人社会では、公用の場合は陽暦、家庭生活では「農曆」(Nung Li, 陰暦) が用いられる。

つぎに、アロールジャングス中国人の主な年中行事はつぎのとおりである。

1. 正月初一（一日）（新年）
2. 正月初九（九日）（拝天公）天の神を拝する。ただし、広東省出身者は拝しない。
3. 正月十五（拝月亮）月を拝する。ただし、福建省出身者は拝しないものが多い。
4. 三月（清明節）父祖の墓まいりをする。（3月何日であるかは年によって異なる。）
5. 五月初五（五日）（端午節）
6. 六月十五（半年円）1年のなかばを終った感謝。
7. 七月十五（七月半，鬼節）祖先および無縁仏を拝する。広東省出身者は七月十四日に行なうことが多い。
8. 八月十五（仲秋節）
9. 十一月（冬至）
10. 十二月三十日（団円節）1年を終った感謝。出稼ぎに行っている家族も父母のもとに帰らなければならない。

7 教 育

(1) 集落の小学校の理事と校史

アロールジャングスに早期に来村した中国人は、表5（前号 p. 80）に示したように、農民や小商人として移住したものであって、生存している年長者においても、英語はいうに及ばず、中国語でも北方系標準語を話せる者はなく、また、文盲ではないが、教育の程度は至って低い。しかし、彼らは子弟の教育には一般に極めて熱心である。しばしば述べたように、世帯番号（26）——在世しているものの中では最初の来村者、表5参照——が60年前にこの集落に到達したときにもすでに私塾があったというほどである。現在でもアロールジャングスはもちろん、附近のどのような中国人集落を訪れても、ほとんど例外なしに、中国人の小学校が見られる。

アロールジャングスには文華学校国民型華文小学校〔BOON HWA National-Type (Chinese) Primary School〕——義務教育6年制——があり、これは、全村民によって選ばれた15名の理事（董事）——理事長（主席）を含む——によって運営される。理事の氏名等は表18に示したとおりである。理事の任期は3年であり、毎年3分の1ずつ改選されることになっている。この小学校の設立から現在までの概略を、校史はつぎのように述べている。

『本校は1929年に創立せられた。創立のはじめ、校舎は1間の穀倉庫を教室に充てていた。最初の教師は曾謀方氏であって、私塾式教育法によって、10数名の学童を教育していた。このようにして、4年を経過して後、当地の教育に熱心な人士、林茂益、鐘志和、洪以劉、梅振林³⁰⁾

30) 林茂益、鐘志和両氏は現在も理事に任じ、梅振林氏は2男がこれに代り、洪以劉氏は不明。

表17 A. J. 中国人学校理事

	世帯番号	年 令	出 身	職 業	階層評価
1	転 居 Simpang Empat 15 35 15	—	—	—	—
2		—	—	精 米 所 經 営	上
3		38	安 溪 仙 都	雜 貨 店 店 員	中
4		75	同 安	雜 貨 店 店 主	中
5		67	安 溪 仙 都	ク	中
1	22 Alor Star 16 69 26	53	広 東 台 山	金 舗 店 主	中
2		18, 60の兄	安 溪 仙 都	—	上
3		34	安 溪 仙 都	精 米 所 勞 働 者	下
4		56	安 溪 山 道	農 業 (小 作)	下
5		31	広 東 台 山	雜 貨 店 店 主 (兼金舗)	上
1	14 28 77 18 60	37	安 溪 仙 都	雜 貨 店 店 主	中
2		45	安 溪 仙 都	精 米 所 經 営	上
3		34	安 溪 仙 都	トラック運送業(運転手)	中
4		40	安 溪 仙 都	雜 貨 店 店 主	上
5		45	安 溪 仙 都	精 米 所 經 営	上

註： 1. 替助人代表——多額寄付負担者 2. 官委代表——政府任命監察
 3. 校友代表——卒業生 4. 家長代表——父兄 5. 受托人代表——旧理事

氏などが、児童の教育水準向上のために、毅然として寄付金募集の先頭に立ち、幾多の困難をおかして募金の後、積極的に工事を推進し、1933年夏、巍峨たる新校舎は、落成するに至った。

新校舎の使用後、学童は50余名に増加したので、理事者はこれに対応するため、この年に翁如錦氏を初代校長として、また、別に教師1名を増員し、新学制の教学法を採用して学童を教育した。約6年を経て翁氏が離任し、1938年初、陳朝鴻氏が校長となり、3年の後、陳氏が辞任し、翌年、江集中氏が校長として招聘された。

1941年、日本軍の南侵により閉校となり、1945年日本の投降によって46年春、再び開校した。再開後、まず彭家良氏を校長に招聘し、また教師1名を増員し、1年後に彭氏が辞任し、後に林德孝氏が校長になった。そのとき学童はすでに70余名であった。

1949年末、林德孝氏が辞任し、理事者は林德音氏を校長とし、1954年末に至って林德音氏が辞任し、李福興氏が任を継ぎ、李氏は1959年末に辞任し、1960年初、陳奇聲氏がこれにつぎ、今日に至っている。

本校は、現在120余名の学童、ならびに華文、英文の専任教師5名兼任のマレー語教師3名および兼任の校務員1名がいる。

本校に戦前多年歴任した理事者主席林茂益氏は、戦後、商務の都合によってアロールスターに転居したので、その後任として林伙盛氏が選出された。林伙盛氏は教育に熱心で、かつ、人望も篤く、学校再開後、ひきつづき10数年の長きにわたって、理事長の職を担当している。』

（2）小学校の現況

（A）学童と教師と校舎

現在、この小学校に学んでいる学童数は、周辺村落からの通学者も含めて211名であり、教師は校長陳奇聲氏以下6名である。さきの校史によると、校舎建築の1933年当時、学童数は50余名であったが、現在ではその4倍を超える増加を示している。校舎は、古色蒼然とした旧校舎のままであり、その後、増、改築は全然行なわれていない。³¹⁾ 6年制の小学校ではあるが、2階の屋根裏の部屋まで教室に充てて、ようやく4教室がとれるだけで、1階は土間のままであって、特殊教室はもちろん、職員室も事務室もない。

学校は、教室と教師の不足によって、やむなく複級教育を行なっている。すなわち、1，2年次は合併して1学級，3年次および4年次は単独，5，6年次は合併して1学級をなしている。

教室は1，2階に各2室あるが、単に衝立で仕切られているだけである。授業は、何の科目によらず、戦前の中国の小学校と同様、音読をすることが多いので、衝立を越えて、相互に大声が反響し、学校は全く喧騒の一語につきる。また、複級の年次は、同教室において、同時間表で授業を行なっているのであるが、教師は1節30分授業の内、前、後半各15分に分けて、対象年次毎の授業を行なう。例えば、1，2年次複級のときは、1年次に対して15分、残りの15分で2年次に対する授業を行なうのである。従って、1年次の習っているときには、2年次は自習ということになり、校舎の狭隘と設備の不完全による喧騒とは、教育上、多大の支障を来している。

学校は政府の規定によって、1日、1，2年次生に対しては210分，3，4年次生240分，5，6年次生270分の授業を行なわなければならない。授業は午前8時から9時30分までに3節，9時40分から11時40分まで4節，昼食のため30分休憩の後，午後0時10分から1時10分まで計9節が行なわれる。

（B）授業の内容

授業内容は、表19の示すとおりである。各学年を通じて、中国語（華語）に関するものが最も多く、算数関係がこれにつぐ。マレー語——巫文（Wu Wên）あるいは、現在では「国語」とよぶことになっている——は、入学時より漸次多くなり、5，6年次に至って、1週7節を学ぶようになるが、5，6年次の華文関係科目14節に比べて、なお、2分の1に過ぎない。

学校においては、毎日の朝礼時における校長の訓辞から、授業のすべてに至るまで、北方系標準語で行なわれる。

31) 校舎新築の計画があつて、理事会は約20ルロン（約5ha）の土地を購入したという。なお、マレー人学校の場合、土地・校舎とも国家の負担によるが、中国人学校の場合は、土地は当該小学校の理事会が準備し、建築のみ国家の負担によるという。

学童は、学校以外の場所では、父祖の中国の出身地の言語、アロールジャングスにおいては、少数の広東省出身者も含めて福建語を使用することが多いが、就学以後は、少なくとも学校内では、すべて、北方系標準語を使用することを強いられる。

(C) 上級学校への進学

就学率は、現在、義務教育であるため、100%であるのは異とするに足りないが、中学校への進学者が計38名もある。中学校は、初級中学の上にさらに高級中学（ともに3年課程）があるが、いずれにしても、学生はアロールスター

へ通学するか、下宿（住宿）しなければならない。ほとんどの中学生は、アロールスターの中学校に在学しているが、世帯番号（18）の長男だけが、ペナンにある韓江中学（高商部）に在学している。

現在までのところ、アロールジャングスには、大学進学者、または卒業者はいない。前記世帯番号（18）の長男は大学進学を希望しているが、彼の説明によると、ペナンの中学校に在学する場合、学資、生活費をふくめて1カ月約M\$70を要するが、香港の大学に進学する場合1カ月約M\$300、シンガポールでは約M\$200を必要とし、欧州へ留学するのに比べてあまり差がない。しかし、台湾の大学に留学する場合は、物価の関係で約M\$50で足りる。なお経費の点のみでなく、台湾の大学では、中国語による講義が多く、日常語も彼らの福建語が通用するので、これも彼が台湾留学を希望する理由になっている。彼は、高級中学卒業後、台湾の大学へ進学して卒業の後、できれば更に、オーストラリアの大学に1、2年間留学して帰国したいと述べていた。マラヤにおいては、自国あるいは英連邦内の国家の大学を卒業しない限り、大学卒と認めないとのことである。いずれにしても、アロールジャングスの若者の中で今年度の内に大学に進学する可能性のあるのは、現在のところ彼1人である。

なお、学生が政治活動を行なうことは厳禁されており、彼の言によれば、学生は校外におい

表19 A. J. 中国人小学校授業科目表

科 目	1・2年	3年	4年	5・6年	計
華 文	9	13	12	11	45
応 用 文	1	1	1	1	4
作 文	—	—	2	2	4
造 句	1	2	—	—	3
算 術	9	6	7	7	29
珠 算	—	—	1	1	2
公 民	—	2	2	2	6
歴 史	1	—	3	3	7
地 理	—	3	4	3	10
自 然	3	2	1	2	8
衛 生	2	2	2	2	8
図 工	7	3	—	3	13
手 工	—	—	3	—	3
音 楽	3	1	1	1	6
体 育	4	2	2	2	10
巫 文	4	5	5	7	21
英 文	—	6	6	7	19
計	44	48	52	54	198

て、5人以上が同一行動をとることさえ許されないとのことであったし、たまたま、彼と懇談した数日前に報道されたシンガポールの分離独立について意見を求めたところ、学生は政治について語ることは許されていないとのことで、一言の感想談さえもひき出すことができなかった。また、「馬大」³²⁾ (Ma Ta) 卒業生は、マラヤにおいては、その大学の政治活動が烈しい理由で、就職に当って困難を伴うことが多いとのことであった。

8 アロールジャングス中国人の故国との関係

(1) 引揚げ帰国と観光帰国

アロールジャングスの中国人が、その出身の地域別にそれぞれの同郷者意識をもちながらも、一方、中国人としての強い民族意識と団結も保っていることは前にも述べたとおりである。例えば、マラヤ生れの中国人でさえも、中国という場合、しばしば、祖国 (Tsu Kuo) あるいは祖家 (Tsu Chia) という言葉を用いる。また、祖国という場合も、その使用例から推察して、祖家の場合と同様、単に故郷とか祖先墳墓の地を指すものであって、とりたてて、国家とか政権の所在を詮索するものではない。

アロールジャングスへ早期に来村した中国人は、家業が一応の安定を見ると、息子などを後継者に残して帰国し、老後は故郷で過した例が多い。しかし、1937年に始まった日中戦争、引きつづく第2次世界大戦、日本軍のマラヤ占領、あるいは、中国の内戦、1949年の中国革命など一連の動乱によって、アロールジャングスと故国との往来はほとんど杜絶していた。現在でも、中華人民共和国とマレーシアの間には国交がないため、帰国には手続上、諸種の不便は伴うが、引揚げ帰国あるいは期間4カ月までの観光帰国は可能になっている。

しかし、集落住民の多数をしめる中、下層者（表10、前号 p.88 参照）は、経済的な理由のみからいっても帰国など考え難い状況にあり、その上、長期間にわたって、故国との往来が杜絶していたため、老年者においては、故国に在る父母、兄弟などの多くが死亡し、反面、マラヤでの係累が増加したこと、および、引揚げ帰国したものは、再びマラヤに渡航して来られないなどの理由によって、現在、引揚げ帰国を考えているものはない。

アロールジャングスの中国人の若者は、しばしば、われわれに対して、中国は強大になった、原子爆弾も保有している、昔日の社会の腐敗と貪官汚吏はなく、治安も頗る良好であると誇らしく語ってきた。しかし、別の面で、それに附随する故国の政治のきびしさ、および、故国からの便りが、多く金銭と物資の送付を依頼するものであることなどによって、故国の生活が不如意であるらしいこともよく承知している。結局、マラヤは物資は豊富であり、気候的にも住みよくて、³³⁾ 「1日働けば、3日遊んで暮せる自由がある」といって、中国を誇らしく語り、観

32) 馬來亞大学の略、現在のシンガポール大学を指す。

33) 「四時都是夏，一雨變成秋」——いつも夏だが、一雨降ると、すぐ爽涼になるという諺がある。

光帰国の希望はもつが、現在では、中国は帰国して住むべきところではないと考えている。

帰国旅行者は一般に³⁴⁾35才以上の者が多い。例えば、世帯番号(60)は、第2次世界大戦後、1954年に最初に観光帰国し、最近には世帯番号(14)が1965年3月から5月まで帰って来た。その間、5名が観光帰国したとのことである。

(2) 観光帰国の1例

中国旅行からアロールジャングスに帰来して、2カ月を経たばかりの前記、世帯番号(14)³⁵⁾に観光帰国について質問した。彼の職業、来村事情などについては、さきに述べた。現在、彼の父と、父の第2夫人および5人の異母兄弟は厦門におり、実母と実弟は安溪県に居住している。たまたま、彼の妻の祖母〔世帯番号(60)、(18)の母〕が最近アロールスターにおいて逝去したとき、肉親死別の悲しい場面を目撃して、彼は故国にある自己の老令の父母の健在のうちに、帰国し孝養を尽してくることを発意した。

パスポート(護照 Hu Chao)での渡航先は、香港となっている。事実は中国に旅行するものであることは、携帯品その他によって、容易に推察できるものと考えられるが、ともかく、そのままで出国できることになっているらしい。

彼の場合、出発港はベナンであり、シンガポールを経て香港につき、さらに広東省汕頭に着した。いうまでもなく、中国の visa は取得していないのであるが、船が汕頭に着くと、官吏が乗船して来て、一応の調査の後、パスポートとは別に帰国証明書を発行して上陸を許可する。——遙々と故国の港まで帰ってから、入国を許可されなかった場合どうするか、との問いに対して、自分達は中国人であり、入国ではなく「帰国」であるから、そのようなことは絶対にないという。

汕頭に上陸の後、バスで厦門に、更にバスで安溪に帰着した。国内旅行は、福建省泉州、福州、江西省鷹潭(東116°55', 北28°15'), 浙江省杭州、上海などを経て厦門に帰着し、再び汕頭から乗船、もとのコースを経由して、アロールジャングスに帰着した。

料金は、総船で往路は M\$180、復路は85中国円——約M\$100——であり、往復および中国内旅費に約 M\$500、土産、小遣いなどを含めて、M\$1,000³⁶⁾で足りるとのことである。

この旅行を通じて彼の得た新祖国観は、役人が親切になったこと、社会が全く浄化されたこと——阿片吸引、賭博、娼妓、盗人などが姿を消し、治安がよいので、夜間でも門を閉める必要がない——、工業化の進展、交通の改善など多岐にわたるが、一言にいえば、中国はよくな

34) 35才以下の者が中国に帰国すると、徴兵されて、再びマラヤに帰ってこれないという。また、マレーシア政府が、若年者は共産主義教育に染まりやすいため、再入国は許可しないのだともいう。

35) 『東南アジア研究』第3巻第5号拙稿, pp. 82~83。

36) 船艙の貨物の上に板をひいて寝る。寝具などは携行する。

37) 別な村人の説によれば、トランジスターラジオ、時計、衣類などを中国に持って帰って、内密で人に頒てば、現金支出は半額ぐらいで止まるという。

ったということである。行政についても、以前は、県一郷一村一保一甲となっていたが、現在では、区一大隊一小隊というように軍隊化され、末端の小隊には、小隊長のほかに書記長がいて、書記長が権力を握っているという。

ただ、マラヤ帰りの彼にとって祖国が寒かったこと、および食料は安価であったが、衣料などは少なく、一般に貧困に見えたという。

彼の結論は、やはり南洋³⁸⁾はよい、暑さも朝、昼、夕の mandi で凌げるし、ここに住み慣れたということである。彼のこの結論は、アロールジャングスの中国人の中年層以下にほぼ共通するものと見てよからう。そして、これは結局、中国は遠くなったということであり、アロールジャングス中国人のマラヤ定着化の傾向を示すものといえよう。

9 む す び

アロールジャングスの中国人集落の特徴を要約すると、つぎのようになる。

この集落地附近への中国人の最初の移住は、決して古いものではなく、約65年以前に遡るにすぎず、初期の中国人は主として、中国から直接、ペナン、アロールスターなどを經由して渡航して来たものであり、マラヤの中、南部の錫鉱山、ゴム園からの流入者はいないと見られる。

住民は、初期のころは、福建省安溪県、同安県、南安県、あるいは広東省出身者がほぼ同率をしめていたが、現在では、安溪県——とくに、仙都村——出身者が多く、中でも世帯番号(60)林伙盛氏を頂点とする林氏の親族・姻族が経済的にも、社会的にも重きをしめる、同郷出身者、同族を中心とする、いわゆる地縁血縁関係によって結ばれている。

住民は、マレー人農民を対象に、主として精米所、雑貨店、金舗など小売業を経営し、あるいは、それらで雇用される店員、労働者として働く。一般にマラヤの中国人といえば、錫鉱山、あるいは、ゴム園従事者を連想するが、アロールジャングスの中国人とそれとの関係はほとんどない。

一般にマラヤでは、中国人は裕福であり、マレー人は貧困であるといわれているが、この集落では、5、6戸の財産家と他の村民との貧富の差はかなり大きい。

現在、住民と故国との関連は緊密ではない。裕福なものは生活環境のよいマラヤの都会地に進出しようとするし、貧困者はアロールジャングスにとどまるよりすべがない。そして、第2次世界大戦後、この集落から離れて行った者はあっても、転入して来たものはいないという事実から推して、この村の今後の盛衰が予測されるようである。いずれにしても、中国人の故国との関連が弱くなり、マラヤ定着化が進みつつあることは事実である。

行政については、いうまでもなく、マレーシアの行政系統には属しながらも、多分に自治村

38) 南洋という場合、日本語での東南アジアという意に同じ。

的な傾向が見られ、また、村内では明確な行政組織は存在しなくても、地縁血縁の家族的なまとまりの中で、集落の融和と団結が保たれている。

宗教はほとんど形態をとどめているにすぎず、個人の信仰というよりは、家庭あるいは中国社会の単なる惰性的年中行事に堕している観がある。こうした祭日（節，Jieh）は、現在では、正月の数日を除いて年中無休で働く中国人達にとって格好の憩いの日となり、関心は祭日の一家団欒の楽しい食事につながるだけである。

教育については、極めて熱意を示している。学校においては、知識の教授もさることながら、中国人としての伝統の礼儀、作法などを失わせまいとする努力が見られる。礼儀、作法の点では、中国人と周辺のマレー人農民とは極めて対照的であり、中国人がマレー人を軽侮する主な理由は、礼儀、作法を知らず信用を重んじないということであり、父母祖先を軽んじ、怠惰で金銭を浪費するということがこれについている。

アロールジャングスの中国人には、現在、マレーシアに定着し、同化しようとする傾向は見られるが、マレー人との同化を考えることは至難である。言語、宗教、風俗習慣の相違に加えて、この数十年の間にわたって中国人の頭にしみこんだマレー人に対する軽侮と不信感は、余りにも大きい。マラヤにおいて、中国人人口あるいは勢力が比較的少ないといわれるケダー州の、しかも、その偏遠の地アロールジャングスにおいても、中国人の経済的進出がこのように強力であり、アロールジャングスなしに、周辺のマレー人農村を考えることが不可能な現実を目撃して、中国人のすぐれた資質と、刻苦耐劳、勤儉節省、友誼と信用を重んじる美風を改めて深く認識したことであった。

終りに、この報告稿を作成するに当って、前号「上篇」の場合と同様、竜谷大学助教授口羽益生氏ならびに京都大学東南アジア研究センター助手坪内良博氏に、一貫して、全面的に御指導、御援助いただいたことを重ねて記し、衷心からの謝意を表したい。